# 吉備路探訪

廣川茂夫

## 吉備の中心地総社

吉備路といえば吉備国の幹線道を想像されそうであるが、ここでいう吉備路とは、出雲路とか、大和路に見るように、古代において文化が発展し、先人達が遺していった文化遺産が一定の広がりをもっている地方のことを意味しているのではないかと思う。

そんなことを考えながら、この吉備路を散策していると、老松の梢に北風の嶋る音、日溜りに身を寄せて聞く野鳥の囀り、総てが古代のロマンにつながるようで、潤いと安らぎを感じる。

吉備路の中心的地域は総社市とその周辺ではないかと思う。総社市の名称の起こりを繙くと、始めこの地は仁徳天皇の皇妃、八田皇女の名代として八田部（八部）と呼ばれていたが、大化の改新（六四五年）によって、吉備国が備前・備中（何れも岡川県）・備後（広島県）の三カ国に分離され、備中国の国府は総社市金井戸に国庁を開いたと伝えられている。その後、和銅六年（七一三）に備前国の北部六郡を割いて美作国が設けられた。

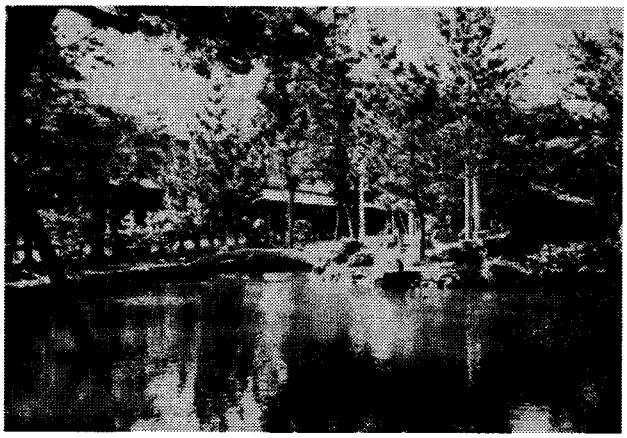
当時、国の祭政は国司が中心となって行なわれていたが、国内の豪族の勢力が次第に強くなっていくにつれ、国司の支配力が衰え、毎年国内三二四社の社を巡拝するには困難となり、そのうえ巡拝の煩わしさを避けるため、国府の近くに社を建て三二四社を合祀したのでこの社を総社と呼んだ。ときに延久三年（一〇七一）の頃のことである。

その後、平安も終わり、鎌倉、南北朝時代を経、戦国時代頃になって、総社を総社宮とか総社大明神と呼ぶようになり、社の総社が地名として呼ばれるようになった、といわれている。

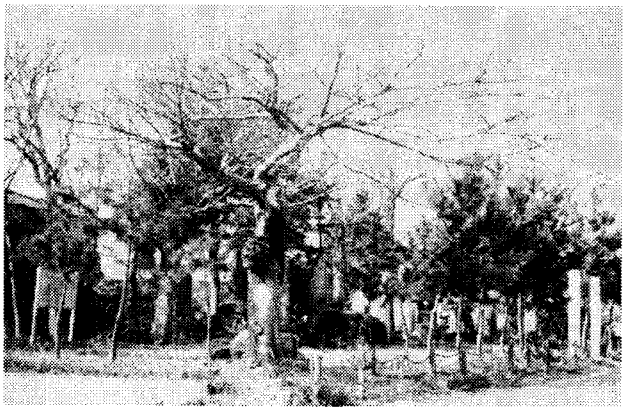
明治八年（一八七五）八田部村が消えて総社村と名付けられ、続いて町に昇格、昭和二九年周辺村を合併、総社市が誕生したのである（『総社市の歴史と文化財』）。

この地方は古い土地柄であることはいうまでもないが、一万年以前の先土器時代（人の生活に土器類をまったく使っていなかった時代）のナイフ型石器などを始め、縄文時代の土器、石器、並びに叩石、磨石、石錘、石鏃など、また弥生時代の住居跡、二千基に及ぶ大小の古墳（総社市内の確認数）など、枚挙に遑のない出土品の宝庫である。列挙することは困難であるが、古代においてこの地方が何故このように文化が発展したのであろうか。

大陸で育った文化は、朝鮮半島を経て日本海側（山陰地方）に上陸、出雲地方にまず定着した。今日、次々と発見される鑪製鉄炉跡も大陸文化の遺産であると思う。その後、先人たちは気候不順な山陰地方から中国山地系を越えて瀬戸内の温暖な地方へと次第に移動したのであろう。この地域は高梁川の流域で肥沃な土地柄であり、瀬戸の海浜に接した自然条件の整ったところで、大陸文化は豊かな社会をつくり出すことができたのである。特に稲の渡来により肥沃な土地は豊穣な稔りを約束してくれた。砂鉄からのはがねは、狩りに、農機具に、戦闘用具にと飛躍的発展を遂げた。



総社宮

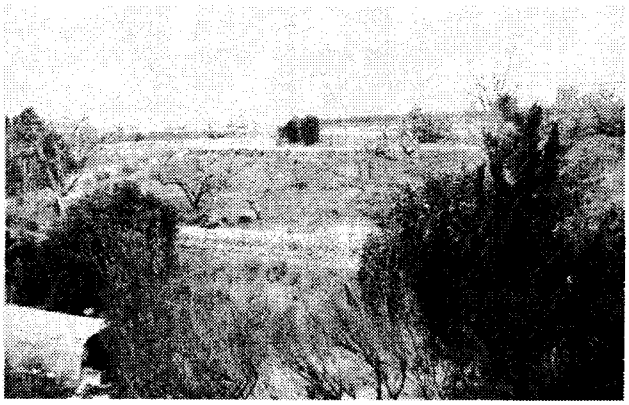


一辺の長さ８丁（８７２ｍ）の方形の敷地に国府があったといわれている。今はその一部が残されている。

## 西団地遺跡群

総社市の西部丘陵地帯に工業団地が造成された。造成に伴って「団地内から集落跡三カ所、古墳五一基、製鉄炉五カ所など多くの遺跡が発見された。集落跡はおよそ一九〇〇年前の弥生時代中期のもので、数軒の竪穴住居と高床倉庫からなる小集落がいとなまれ、この時代にこの地域で米作りが始まったことがうかがえる。

又、古墳の大半は後期のもので、六世紀後半から一〇〇年近くにわたって順次築かれたものである。そのうち三基には鉄の滓（かす）が供えられてい

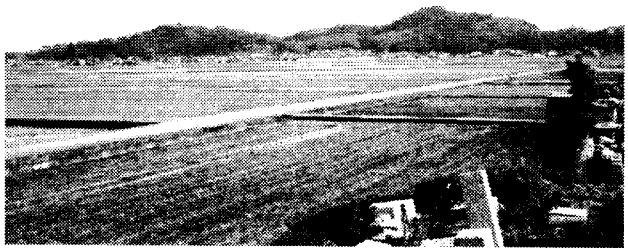


ナイフ型石器が出土した浅尾陣屋調練城跡

て、葬られた人が鉄造りに何等かの関わりをもっていたことが推察される。この遺跡群のうち最も注目されるのは製鉄遺跡である。同時代に総計六〇基の製鉄炉と一六基の炭窯が築かれ鉄造りがおこなわれていたものと思われる」と説明されている。

## 三輪丘陵古墳群

総社市の南部地帯は古墳群の密集地帯である。平地部の中に小高い丘があると殆どが古墳或いは、古墳群といっても差し支えないだろう。三輪丘陵地帯も幾つかの古墳群によって構成されている。



三輪山全山古墳の山であった。
写真を撮る足下も古墳であった。

宮山墳墓群（三輪）

東南より造山古墳を望む。

## 宮山墳墓群（三輪）

宮山墳墓群は今からおよそ一七〇〇年前の弥生時代末から古墳時代初期の墳墓遺跡である。現地の説明によると、全長三八ｍの墳丘墓と箱式石棺墓、土壙墓、壷棺墓等で構成されていて、村の共同墓地と思われる。東端に位置する墳丘墓は盛土で作られた径一三ｍの円丘部と、削り出して造った低い方形部をもち、全体として前方後円墳状の平面形をしている。この墳丘には石が葺かれ、特殊器台がたてられていた。円丘部の中央には円礫や割石を用いた、竪穴式石室があり、鏡、銅銭、ガラス小玉、

鉄剣、鉄鏃などが副葬されていた。おそらく村のかしら（首長）を葬ったものであろう。これに比べて周辺にある土壙墓や、箱式石棺墓、壷棺墓などは規模も小さく貧弱で、村人の墓と考えられる。

このような埋葬施設の規模や構造、副葬品の相違は当時の社会に、すでに支配するものと、される者の差をうかがわせる。やがて首長が卓越した存在として村人に君臨し、巨大な古墳を造営する時代の歩みを示している、と説明されている。

宮山古墳群に隣接して一段と小高い頂上が天望台古墳である。この古墳は全長三五mの前方後円墳で、地山を利用して築造され、円礫の葺石、埴輪の破片等も採集されたという。

続いて全長七〇mの三笠山古墳が連座している谷を越え、東側の丘に登ると、目下発掘中の現場に出会った。南は殿山古墳群、北の嶺続きは船山古墳に続いていて、驚くべき古墳群である。

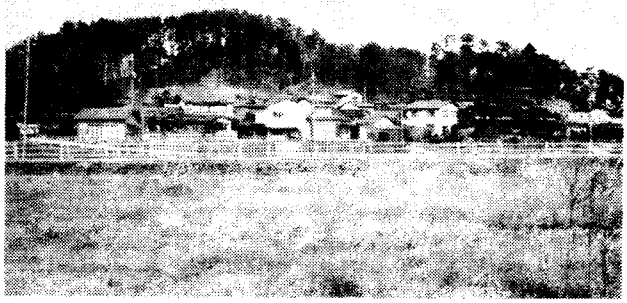
## 作山古墳

大正一〇年三月三日国指定史跡となった作山（つくりやま）古墳は雄大で、巨大な前方後円墳である。独立した小丘陵を削り、整形加工したもので、全長約二八五m、後円部径一七四m、同高さ二四m、前方部長さ一一〇m、同幅一七四mの規模をもっている。三段に築成され、各段には密接して円筒埴輪が立ち並び斜面は角礫でおおっている。造り出しは北側には存在するが、対称的に南側にもあったかどうかは疑問である。外周には周溝がなく、複数の丘を残すなど巨大な墳丘の割には端整さを欠く面もある。作山古墳の規模は全国的にみても、第九位に相当し、県内では全長約三五〇mで全国第四位の岡山新庄下、造山古墳につぐもので、古墳の規模が豪族権力の反映又は象徴であることからすれば、本墳の被葬者が吉備全域に君臨すると同時に、近畿の勢力と肩を並べるほどの勢力を保持しており、その巨大な権力によって、何千、何万という人々を動員し、長い年月を費やしてこの巨大な古墳を作りあげた、と説明されている。

尚、この古墳は五世紀中葉頃のものといわれている。

## 造山古墳

造山（つくりやま）古墳は総社市と岡山市との境界近くにあって岡山市に属している、全長三五〇mの巨大な前方後円墳である。天皇陵に次ぐ全国第四位の巨大墳で、天皇陵以外にはその例をみないものである、といわれている。後円部の高さ約三〇m、前方周辺には陪塚六基が眠っている。この規模から考えると、かつては大和と肩を並べた勢力の持主で、吉備大王



作山古墳南側より望む。

の墓ではないかといわれている。東側の急な階段を登ると、頂上は意外に平坦で広く、社があって荒神が祀られている。その傍らに長方形の石棺が置かれているが、地元の人の話では、

「ほかの場所から運んできたもので、私たちはわからないが、随分と古い話だ」

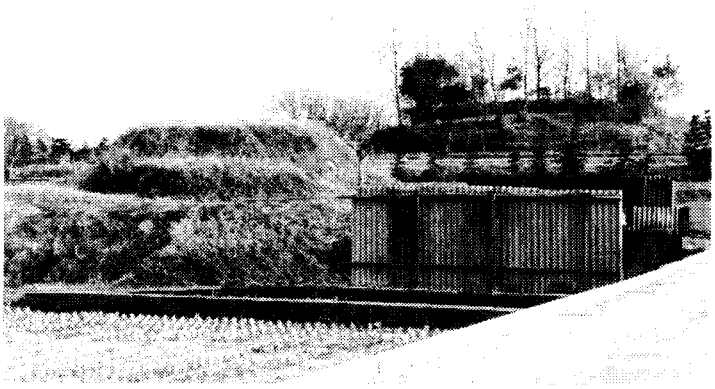
ということだった。石棺の材質については九州の阿蘇凝灰岩製で、特異な長持形石棺であるとの調査結果であるが、誰が、どうしてどうやって遠方から取り寄せたのかわからない、とのことである。

吉備大王の墓といわれる古墳の後円部頂上からの眺望は、古代の吉備を想像するにふさわしい所ではないだろうか。

陪塚古墳は王の一族か、または家臣の墓と考えられるが、主人に殉死した人の墓であるともいわれている。

東南より造山古墳を望む。

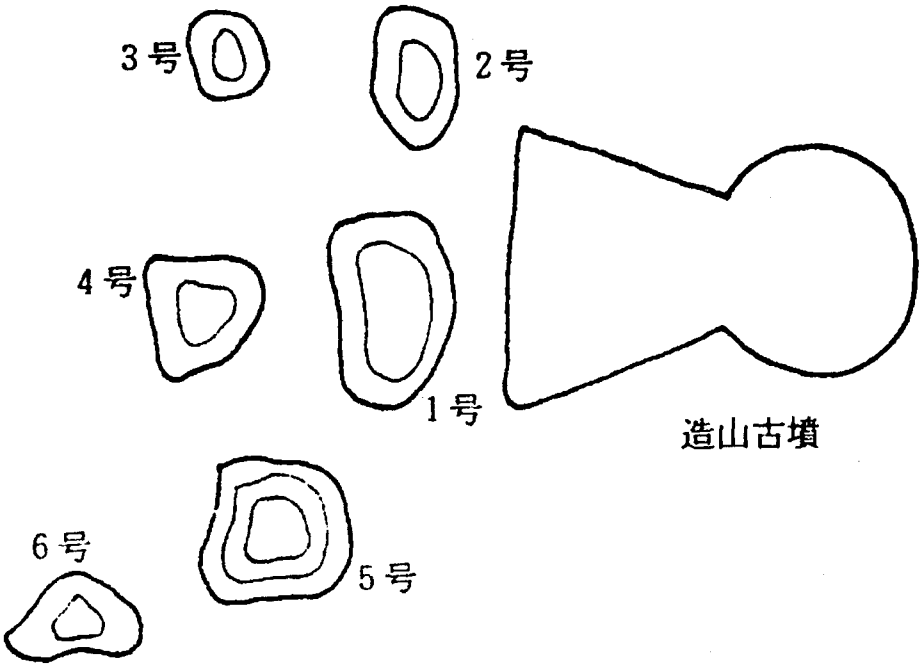
造山古墳上にある石棺



手前造山３号古墳、右手造山４号古墳

一号古墳は直径四〇mの円墳である。明治のころ発掘されて鐘、馬形帯鈎金などが出土している。五号墳は全長七〇mの前方後円墳で、千足装飾古墳ともいわれている。内部の石室を区切っている境石に模様が彫られているところから装飾古墳といわれるようになったのである。一号古墳と同じく明治末期発掘され、鏡、玉、鉄器などが出土している。この古墳構造と装飾文様など、北九州地方に似たものがあるところから、造山古墳とともにこの主たちは、北九州や、朝鮮半島に関係があるのでは、と推測されている。

造山5号古墳（千足装飾古墳）



造山古墳と周辺古墳分布図

## 備中国分寺

松林の丘に三八mの五重の塔が聳え、四方何れの位置からも人々の心を捉え、歴史的環境に浸る気持ちをかきたててくれる。

この国分寺の創設は、大化元年（六四五）大化改新が発せられ、五〇数年後の大宝二年（七〇二）に大宝律令を施行し、大化改新はここに完成確立した。しかし、その後律令制は次第に行き詰まりとなり、その上疫病が蔓延し、人心の動揺等、社会不安は極に達した。その混乱を鎮め、秩序回復の方途として、唐朝の先例に習い、天平一三年（七四一年。また の説に天平一〇年とも）聖武天皇の勅願によって諸国に創立された寺院である。

「金光明四天王護国之寺」を僧寺とし、七重の塔を築造せしめ、「金光明王経」一〇巻、別に天皇書写といわれる金字「最勝王経」一巻、尼寺も「法華滅罪之寺」と呼び「法華経」一〇巻と僧寺同様に、金字「最勝王経」を安置せしめて各寺水田一〇町歩を与え、僧寺に二〇僧、尼寺に一〇尼止住させ、両寺とも国司の支配下に置き、管理運営の掌にあたらしめた。所謂国司が祭政を司どったのである。平安中期になると国家の保護を失い、多くは廃寺となり、またはその後に興る諸宗や神社に変わったという。

備中国分寺。　最寄りには電柱の影は見えなかった。

因みに奈良と言えば大仏、大仏といえば奈良というほど東大寺は全国的に有名な寺院である。この寺院も聖武天皇の発願によるもので、天平一五年（七四三）大仏鋳造の詔勅がだされ、七四七年鋳造開始、二年後の七四九年に完成した。大仏開眼供養（落成法要）は、天平勝宝四年（七

備中国分寺山門

五二）孝謙天皇によって盛大な供養が行なわれたという。この東大寺は国分寺と同じく「金光明四天王護国寺」であり、総国分寺ともいう。全国の国分寺総括の役割をもつ、所謂総本山であったのではなかろうか。古代において鋳造の技術もさることながら、膨大な国費を費やしたこの事業は一面国家財政にも影響し、律令国家の衰退を招く結果となったと伝えられている。長い歴史の過程の中にあって治承四年（一一八〇）及び永禄一〇年（一五六七）二回に亘り、戦乱の兵火により焼失している。

備中国分寺も、延元元年（一三三六）足利尊氏が反旗を挙げ、九州から京へ攻め上る途中近くの福山城において、新田義貞の先鋒である江田軍との合戦が激戦となり、その煽りによって殆どが焼失したと伝えられている。

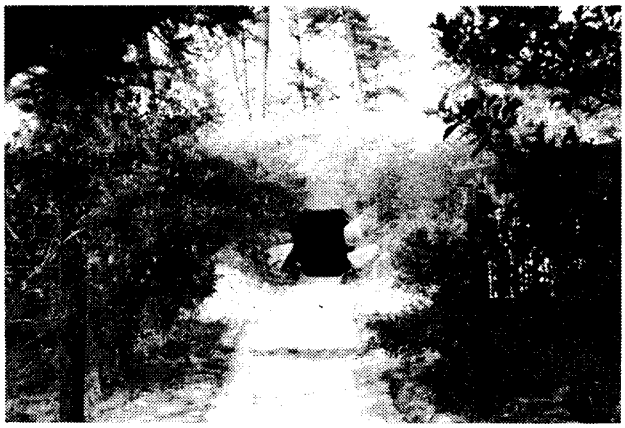
寺域は東西一六〇m、南北一八〇mで、周囲には約一・二mの土塀がめぐらされており、寺内には南門、中門、金堂、講堂、塔などの伽藍が配置され、雄大なものだったという。現在の伽藍は江戸時代中期（一七一七）に至って、備中清水山惣持院（万勝寺）の住職、僧鉄和尚が当時の領主蒔田氏の援助を得て、約六カ年かけて再建されたもので（五重塔は一〇〇年後に完成）日照寺国分寺として再興された。この塔は三層までは、ケヤキ材、四～五層は松材が主で、心柱が五層まで貫いている。塔内には釈迦、阿弥陀、宝生、阿閃の四如来が安置されている。

この丘の西側には江崎古墳、東側にはこうもり塚古墳がある。この附近一帯は吉備路風土記の丘として遊歩道（自転車道）が整備され、また、丘の松林の下刈も行き届いてしかも、静かで風情があって、自然の調和が実に美しく、流石に風土記の丘といわれるだけあって、「一度あるいて見ませんか」の呼び声通りである。国分寺の創設については『続日本紀』に見られるように「その造塔の寺は、国の華であるから、必ず好所を選んで実にすべきこと」等幾項目か定めがあるが、場所の選定については成程と感銘深いものがある。県立自然公園は八八七ha、レンゲ（蓮華草）祭りは毎年四月二九日である。

## こうもり塚古墳

こうもり塚という名称は、何に由来するか分らなかったが、地元の人は、こうもりが沢山いたから自然にそのように呼ぶようになった、と話してくれた。江戸時代盗掘されたといわれるが、その後に恐らく開口から蝙蝠が出入りし、栖みかとしたものだろう。

この古墳は六世紀後半に造られた全長約一〇〇mの前方後円墳である。内部の石室は巨岩を用いた横穴式で、羨道とその奥の玄室とからなってい



こうもり塚古墳石室入口

る。玄室には家形の大きな石棺がおさめられている。これは、遠く井原市野上町（岡山県）産出の貝殻石灰岩を材料としたもので、くり抜き式石棺である。ほかにも陶棺や木棺がおさめられていたと考えられ、後期古墳に一般的な複数埋葬であったことがうかがえるという。

羨道の長さ一九・七m、玄室の長さ八m、高さ三・七m、天上は三個の石で覆っているのを見ると、千数百年前にどのようにして覆ったのか驚くばかりである。この石室の巨大さは全国第四位のもので、この古墳の主も吉備地方における最有力者であったと考えられる、と説明されている。『古事記』に、仁徳天皇と吉備黒日売（きびのくろひめ）の恋物語がある。黒日売は吉備豪族の娘であるが、天皇に殊の外愛されていた。お后がやきもち焼きで黒日売はいじめられ、辛抱し切れなくなり吉備に帰ってきた。帝は彼女のことが忘れられないので、吉備の国まで逢いに来られ、一時の蓬瀬を楽しんだということである。

『古事記』に

こうもり塚古墳石棺　屋根型の蓋が特徴的である。

山方に　蒔ける青葉も
吉備人と　ともにし摘めば楽しくもあるか

帝が黒日売を偲び詠んだ歌であるという。又、山方という地名は道路を隔てた隣村の山手村のことではないだろうかと伝えられていたが、古墳が築かれたのは六世紀後半であり、仁徳天皇とは一世紀以上も違うので唯の噂話であったのか、と思われる。

## 国分尼寺

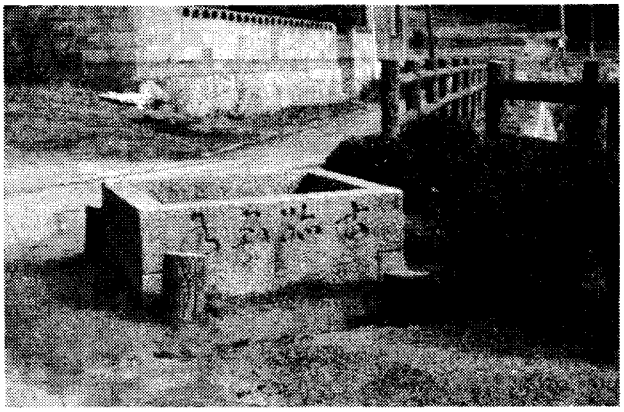
こうもり塚古墳から約四〇〇m東方、手入れの行き届いた松林の丘に国分尼寺跡がある。今日では一二五〇年前の面影を偲ぶことはできないが、その遺構は荒されず保管されていた。『総社市史』は次のように説明している。

備中国分尼寺跡　松林の中に礎石が点在していた。

「寺の存在とその位置は明らかである。丘陵を切断して整備している東辺・三方は現存する遺構でとらえることができる。東西一八〇m（三六〇尺）南北に一六m（七二〇尺）の規模である。この規模からすると、天平時代の壮大さを感ずる。南の前面は幅員六mの東西道路に面し、南門がこの道路に面し、南門の北に四m附近に中門、奥に進むと金堂、経蔵、鐘楼、食堂などなど礎石の配置から考えられる」と記されている。

## 松井の井

こうもり塚古墳の裏手に池がある。池の前方には民家が散財していて、堤を渡り切ったところに井戸がある。池の側にある井戸だから水位はどうだろうかと、覗き込むと池の水面よりはるかに高く、池とは関係ないのだとわかった。この井戸は、総社市の長良の「菊の下水」上林の「臼井」とともに三名水に数えられているということである。



松井（所の名称）の井戸　　昔日の面影を残していた。

井戸側の掲示には

むすびあぐる　松井の水は底清み
　うつるは君が　千代のかげかも

常盤なる松井の水を
　むすぶ手の　雫ごとにぞ千代は見えける

藤原茂明
藤原資実

この二首の和歌は久寿二年（一一九八）の土御門天皇即位にあたって行なわれた大嘗会のときに詠まれたもので、これらの和歌に詠まれた松井はこの井戸であると伝えられている、と記されている。

近所の老人の話では、国分寺の僧と、国分尼寺の尼とが毎夜のように水汲みにかこつけて、この井戸を出会いの場所とし、恋を囁いていたと伝えられ、俗に〝ささやきの井戸〟といっていると話してくれた。

## 石井山本陣

鉛色の雲が足早に流れ行く風の強い日であった。

麓で教えてくれた主婦の話では、今は道もなく登れないといったが、一四年前に一度登った道である。行けるところまで行ってみようとしたが、言葉通り状況はすっかり変わっていた。二〇〇m以上も続いたであろう竹藪かすかな道の痕跡らしいところを選んで登るのだが、方向を違えてはと少々不安である。竹藪をを過ぎると今度は雑木林で、一〇m先も見えぬ程の繁りようで、棘で手を引っかけられたり帽子をとられたり、散々な目に会いながら頂上を目指した。

この石井山に羽柴秀吉が本陣を置いたのは、天正一〇年（一五八二年）五月七日である。今から四一二年前この谷から秀吉もこうして登ったの

だろうか、その頃はもっと松や雑木が繁っていたに違いない。さぞかし苦労して登ったことだろう。そんなことを考えながら雑木をかき分け一歩一歩前進した。突然見覚えのある標識が倒れているのを発見。早速雑木に立てかけて写真に納めることにした。右下の谷に軍馬を繋留したとあるが、見当がつかない。又暫く登ると清水宗治首塚跡の標識を見付けた。この標識も下部が腐って倒れている。以前は自然石に次のように刻まれていた。

清水宗治首塚跡　明治四十三年二月　高松城跡移転

「この山上では余りにも気の毒だ。城の本丸に移した方が良い」と村人達が移転を企て、発掘した明治の其の当時、遺骨が少々と錆びて三片にこわれた短刀が出てきたと、話に聞いたことを思い出した。今はその塚石も見当たらない。さてどこに片付けられたものであろうか。

苦労して頂上に到達したが、本陣後の標識はついに見付けるとこができなかった。しかし、石井山からの眺望は眼下の高松城本丸、二之丸、三之丸跡は指呼の間である。総指揮官としては絶好の場所であったことが頷ける。

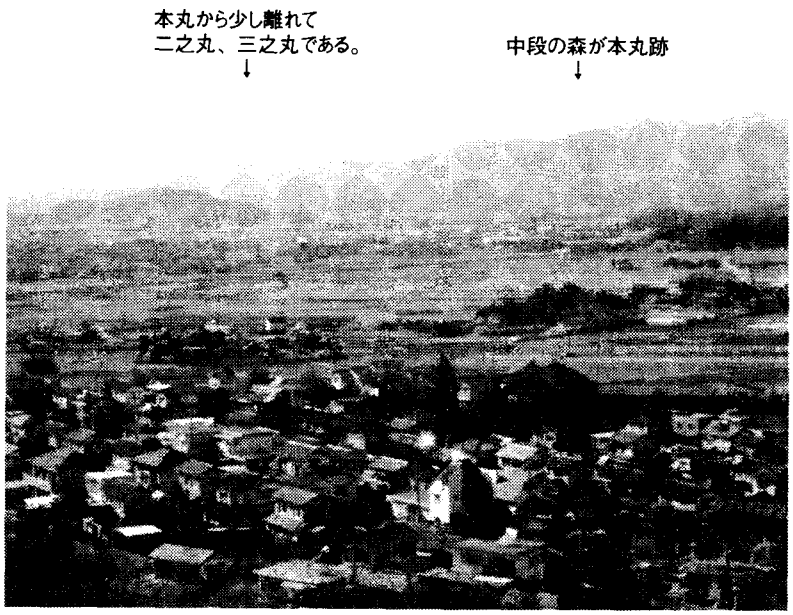
左に吉備線（自岡山駅、至総社駅間）高松駅附近から遙か西方足守川堤防までは随分と距離があるが、これが一面の大湖沼と化した光景はど

清水宗治首塚跡

豊臣秀吉の軍馬繋留地跡

んなにか広大なものであったろう。

秀吉の大胆不敵迅速果敢、勝つためには、限界をいとわぬ物量投入、不屈の根性には到底想像の及ぶところではない。腰を下ろして寒空に暫し感慨に耽る。




政治は国民のためのものであって、決して為政者のものでないことは今日の常識であるが、戦国動乱の時代果たして国民のために天下統一を考えていたであろうか。力関係で相手を倒し次第に領有を拡大し、あわよくば国家権力を掌中にせんものと、互いに戦を挑んだのであろう。それがために多くの犠牲を伴ったことは疑いもないことであるが、一面考えようでは群雄割拠する中で、誰れかが国家を統一し、何時かは近代化、文化国家を創造しなければならないことであった筈だ。その意味においては、織田信長の功績誠に大なるものがある。騒乱の世を一応の下地を造り、続いて秀吉の国家統一、徳川幕府二六〇余年を経て明治に至るまで長期の年月を要したが、勿論封建社会の弊害を見逃す訳にはいかないにしても、今日の日本国家を形成する避けては通れぬ基盤造りであったのではなかろうか。

## 織田と毛利の対決

信長の国家統一の野望の過程で、石山寺（大阪城の地）程難渋した例は少ないのではないか。一向衆徒が一揆を起したのが元亀元年（一五七〇年）である。信長はこの一向衆を攻め倦んだ末、和解の調定を受けざるを得なかった。時に天正八年（一五八〇）のできごとである。前後一一年間の長期に亘る攻防は、一面その背後の援助によるものだといわれている。即ち中国路においては毛利の支援である。毛利輝元、小早川隆景などは瀬戸内海の水軍八〇〇隻を動員し、木津河口で織田水車と交戦、石山寺へ七〇〇隻に満載した米二万俵を送り支援している。毛利からの救援食糧はしばしば行われたという。又、越後からは黄金、白米一

五〇〇俵、油、味噌、反物等が送り込まれている（『真宗史概説』）。このように石山寺へは各方面からの支援が後を絶たなかったことだろう。信長はこのことがあって以来毛利との対決は避けることのできない宿命となった。期到来、天正一〇年正月毛利攻略の軍議が決定され、羽柴秀吉が総指揮を命ぜられた。

その頃毛利方においても織田軍の攻撃を察知したのか、備中高松城は堀を浚渫、拡充、橋の改良など防備を図っている。その当時毛利の最前線は山陽道においては、備中国（岡山県）高松城、宮地山城、冠山城、加茂城、日幡城、庭瀬城、松島城等があり、何れも防戦態勢を固めていた。

秀吉は三月一五日、二万の大軍を率いて姫路城から出陣し、岡山市南方児島本面及び笠岡市南方塩飽諸島の水軍を味方につけ、又、大阪商人をして備中・備後（広島県東部、何れも毛利の支配下）地方の糧米の買付を行わしめ、四月四日備前岡山城に入城した。毛利の前線基地の補給地である後方地方の糧米を事前に買占めることは、相手方を混乱に陥れる作戦であった。これを知った毛利方は大阪商人に米を売る者は重罪に処すると布告したが、こと既に遅く効果はなかった。

岡山城を拠点とした秀吉は、蜂須賀正勝、黒田官兵衛の二将をして吉備津神社宮司堀家掃部を使者として高松城主清水宗治に信長の書状を提示、備中国（一説には備中、備後二カ国ともいわれている）を与えることを条件として降伏を奨めたが、宗治は首を縦に振らなかった。説得する者としては、承諾しないから直ちに攻撃という訳にいかず、できれば無血和解の方途はないものかと、黒田官兵衛は単身無腰で城中に趣き再度宗治を説得したが、義理を重んずる宗治は幾ら好条件であろうが、毛利に背を向けることは千載に汚名を遺すことであると、頑として従わなかった。時に天正一〇年（一五八二）四月一〇日のことであった。

その間秀吉は高松城周辺の地形を細かく調査していた。四月一四日、岡山藩の一万の兵を加え、三万の大軍で竜王山（高松城の北東の山）に本陣を置き、翌一五日、宮城山城を攻略。一七日、冠山城攻略、加茂城、日幡城、亀石城は内通により陥落。次いで高松城の周辺を攻略し、愈々高松城の総攻撃である（一説には四月二七日高松城第一回総攻撃、冠山城、日幡城陥落ともいう）。

## 高松城水攻

高松城は典型的な平城である。濠の水面から高さ四mの平坦な土地に二層三階の城で、周囲は広々とした沼で囲っていた。一説には古墳であったのではないかという説もある。城に通ずる道は細く沼は泥土が深く、要所に橋がかけられているが、取りはずしや、出し入れのできるものである。沼に一度入ると行動の自由を失い、容易には活動できない有様である。秀吉軍は城を取り囲み幾度かの小ぜり合いを重ねたが、一気に攻めこむことは、多くの犠牲をともない無謀であると秀吉も能く承知していた。

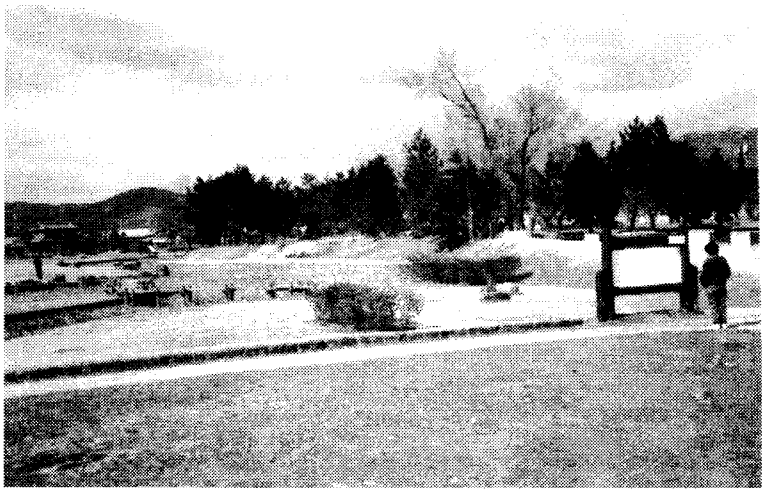
高松城攻略の戦術会議を開いた秀吉は、黒田官兵衛の発議による水攻を採択し決した。工事の概要は高松城の西方足守川を堰止めし、土手を切って水を流し込む。堤防はその地点から蛙ケ鼻に向けて土手を築くと

いうものである。又、水不足を予測して城の北方竜王山の背後を流れる長野川を掘って水を導き、なしい峠を越え導入させる。五月七日軍議は決した。秀吉は直ちに竜王山から石井山に本陣を移し陣頭指揮に当たった。堤防の位置については秀吉自ら乗馬して現地を歩いた。その足跡に要所要所青竹を立てて築堤位置にしたという。

高松城跡から六〇〇mの所に吉備線高松駅がある。国道一八〇号線から高松駅に入る角の民家の壁に次のような説明の掲示板がある。

《高松城水攻築堤の跡》

天正一〇年（一五八二年）の春、水攻の時の堤防が此所を通っていた。蛙ケ鼻から足守駅の上の距離三一一九mで高さ七m、底巾二三m、上幅一一mあり、二m（約一間）につき、土俵三五〇〇俵が必要であった。土俵一俵につき米一升、銭百文やるという約束の高札を備前の方まで建てて人夫を集めた。この戦争は織田信長の命を受けた、羽柴秀吉が三万の大軍をもって高松城を囲んだとき城将清水宗治以下五千の将兵が勇戦奮闘したため、攻めあぐんだ秀吉が黒田官兵衛の献策を入れて、やがて起きる織田と毛利の決戦場として自から陣頭指揮をとって僅か一二日間で五月一九日に完成させた堤防の跡地である。五月二一日毛利の援軍四万が到着したが、秀吉方の防備がきびしくて切ることもできず、遂に六月四日宗治公が主家の安泰と部下五千人の命を救うため潔よく、自刃されたので講和が成立した。



立木のあるところが本丸跡で周辺は公園化が進んでいる。

秀吉は直ちにこの堤防を切ったので毛利軍の追撃もなく、一週間後には、本能寺で逆臣の手で繁れた信長の弔合戦をして天下統一の大業を引継いだのである。高松城はここより七〇〇m北西にある。

昭和五七年五月四百年祭に当り建立　高松城跡保興会

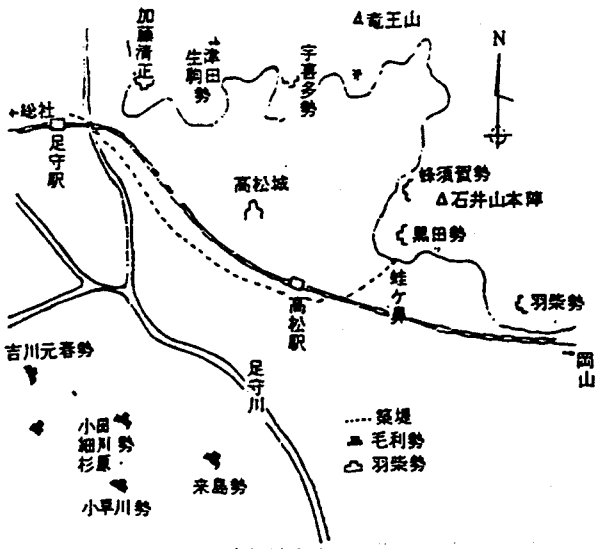
この掲示板は交通量の多い、しかも交差点であるので余程気をつけないと見逃して終う。尚この掲示の以前のものは昭和三七年一〇月のものがあったが、それにはこの工事に一万人以上の兵と農民を使用とあり、土俵一に銭百文、米一升を与え（この約は守られなかったと伝えられる）と記されていた。『武将感状記』には、銭六三万五千四〇貫文、米六万三千五〇四石を要したとある。羽柴秀吉ともあろう者が農民をだまして働かせるようなことは有り得ないことだと思うが、真実は果たしてどうであったのか。

足守川の堤防に立ち、又珪ケ鼻の堤防遺跡に立って眺めると、如何に物

量作戦とはいえ一二日間で完成した偉業は只々驚きの外はない。

話はさかのぼるが、長大な堤防が完成するや、柵を設けたり、見張り場を置き、夜間は篝火を無数に焚いて警備を厳重にし、一方附近の寺院に命じて降雨の祈祷を行わせた。時は梅雨季であり二日三晩の豪雨により堤防内は満水、城は浮島の観を呈した。完全に外部と遮断されたのである。本丸との連絡は舟より外には方途がなくなった。そこで奇妙なことが起きた。蛇や百足などが一斉に城中に集って来たといわれている。余程困ったことだったに違いないが、一八一 日大湖水が出現したのである。

毛利の援軍は五月二〇日とも二一日ともいわれているが、小早川隆景二万、吉川元春一万、毛利輝元一万、毛利元清五千の大軍が来援したが、河川が悉く氾濫して大軍の行動を阻害してままならず、おそらく各要所の陣中から高松城の大湖水を眺めて驚嘆し憤慨したに相違ない。秀吉の大胆な作戦に大湖水を眼前にして、水は日々高まるばかりであり、なす術もなく、遂に五月二四日毛利の使者転小四郎（字多田小四郎）が夜陰に案じて密かに城に忍び込み、宗治に「この際一時降伏して機を見て帰るように」と毛利軍の意図を伝えたが、宗治は「城兵一同は死を覚悟の居城である。今降伏するなら最初から降伏している。それよりも東軍を撃って欲しい」と断った。小四郎はそのことを毛利方に伝えることを約して城を去った。毛利軍の総攻撃の体制は整ったものの秀吉軍の陣は堅固で、手の施しようもなく立ちすくむ形となった。そこで毛利軍は軍僧である安国寺恵瓊をもって秀吉に講和を申し入れ石井山本陣で接渉した。秀吉は中国七カ国の割譲、宗治の首、それに人質の三条件を提示、交渉の結果七カ国が五カ国と緩和されたのみであった。



高松城水攻配置概図

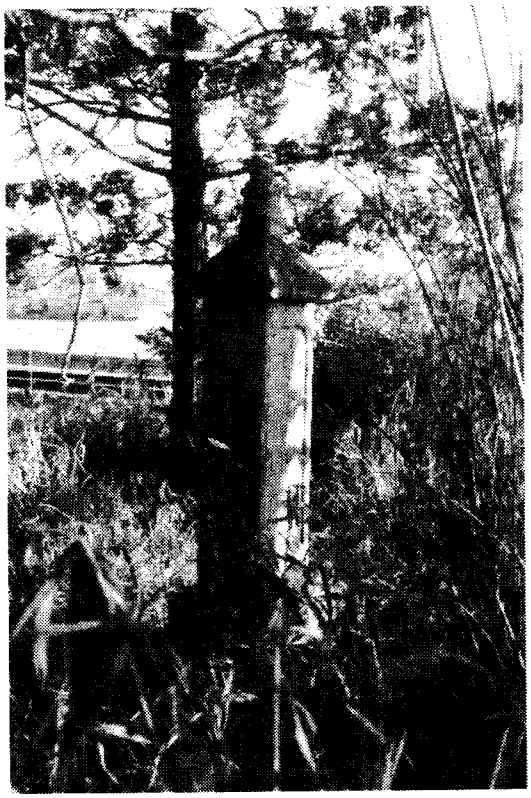
「安国寺恵瓊は安芸国沼田郡（広島）の人で、弁舌が鮮やか機転に富み毛利輝元に重用された。織田信長と足利義昭との調停に貢献、又秀吉と毛利輝元の仲裁に尽力して秀吉の信任を厚くし、伊予六万石を与えられたが、関ケ原において石田三成に加勢し敗れて京都六条ヶ原で斬殺された」

## 清水宗治の自刃

秀吉は小城といえども守るに固い高松城を攻めあぐんで、堤防を懸命に築堤していた頃、信長に応援を求めた使者は五月一五日頃安土に到着していた。信長は詳しく状況報告を聴取するや、直ちに準備にとりかかり、明智光秀以下三万五千の援軍に出動を命じた。信長本人は茶人達七

〇人程の者と安土を出発し、六月一日、京都本能寺に宿泊していたところを、二日未明、光秀の謀反による不意打ちに遭い、敢えない最後を遂げた。時に信長四九歳の熟年であった。

光秀はことの状況を毛利に伝えるべく使者を立てたが、庭瀬街道（岡山市と倉敷市との中間）で秀吉方の警戒線で怪しい一人の旅人を捕えた。取調べの結果事件の真相が究明され、藤田伝八郎といい僅か二〇時間程で二四〇㎞を走破している。遂に石井山本陣の秀吉の前に連行され、秀吉は前後の事情を聴取するや、秀吉自ら一刀のもとに切り捨てたといわれている。後世の者が塚を立て霊を弔った。



吉備線沿線の林の中に藤田伝八郎（光秀の使者）の塚は苔むしていた。

信長の死は厳重に口止めされ、誰一人として口外することがなかった。山陽道の警備は厳重に取り締まりを強化し、交通を遮断して和議を急いだ。毛利軍の安国寺恵瓊を呼び、織田信長の本隊が応援のため安土を出発したと伝えがあった、自分としては応援が来るまでに決着をつけないと面目が立たないので宗治が自刃すれば、部下の命は助ける、織田・毛

清水宗治の首塚は本丸中央に訪れる人々に弔われて静かに眠っている。

利の領有境界は高梁川とする、この和議が成就した暁には、一国の城主に取り立てるよう取り持ちすることなどを申し渡した。恵瓊は直ちに小船で城に赴き、その由を宗治と伝えると、宗治は主家の安泰と部下五千人の生命が助かるならばと、覚悟の決意をしたという。六月四日巳の刻（午前一〇時）秀吉からの差し廻しの船に乗り、石井山本陣方向へと漕ぎ出した。中ほどで検死役の堀尾茂助吉晴の船と出会い、秀吉から贈られた酒肴で宗治主従は杯を取り交わし、この世の名残りに「笙歌遙に聞こゆ孤雲の上なれや、聖衆来迎す落日の前とかや……唯心の浄土とはこの誓願寺を拝むなり」と誓願寺の曲舞を舞い納め、

浮き世をば今こそ渡れ
武士の名を高松の苔に残して

と辞世の歌を残し、四六歳を一期として旅立った。

城内のものは勿論のこと近く物陰からこの有様を見守っていた里人も慟哭したという。

検死役の堀尾茂助は宗治の首級を石井山本陣の秀吉に差し出し、首実験後本陣の山中に手厚く埋葬した。首なき胴体は本丸北西方（本丸より約一〇〇m）に葬り、今日尚現存している。その傍らに次のような説明がなされている。

戦国武将の宿命とはいえ、悲惨な最期を遂げた
宗治の胴塚は民家の庭先にたたずんでいる。

《胴塚の由来》

時に天正一〇年（一五八二年）六月四日、自決した高松城主清水長右エ門宗治公の首級なき胴体遺体は舟上のまま本丸に掃ってきた。迎える家臣、身内の者共押え切れぬ涙に感極って一同の嗚咽がおこった。やがて回向につつまれ他の下丸、この地に手厚く葬られた。その墓地に臨んだ公の介錯人国府市佑は己が刀で首を切り、そのまま落ち込んで自刃し、亡き公を追った。この主にしてこの臣あり、主を思う心情躍如たるものがある。

高松城址保興会

## 水奉行の切腹

足守川からの取水は計画通り、大湖水出現という、水をもって守るは水をもって攻める、逆手にとった戦法が功を奏したが、水不足を懸念して竜王山の北方からの水路掘削工事は岩盤に阻まれて予定通り工事が進捗せず、遂に落城に間に合わなかった。水奉行根津権六は工事現場で切腹し、その責任をとったという。里人はその徳を偲んで自刃の趾に手厚く葬り、一本の松を植えて霊を弔った。この松を水奉行の松と呼んでいたが、大正二年落雷で枯死し、二代目を植えたが又も枯れたという。水路脇の林の中に高札が立っている。

水奉行の切腹の原因となった長野川の谷合

訪れる人も絶えた水奉行根津権六の塚

中国地方の平定を目指す織田信長は、この地方を支配していた戦国大名の毛利氏の攻略を羽柴秀吉に命じた。秀吉、天正一〇年（一五八二年）三月兵力三万をもって備中国に攻め入り、国境の諸城を攻略したが、備中高松城だけは攻めあぐねた。このため城の近くを流れる足守川を堰止めて水攻めにして、城主清水宗治に降伏を迫った。水攻めにあたって足守川の水だけでは不足の場合を考え、高松背後の山間を流れる長野川を堰きとめ「なしい岨（だに）」を約九m掘り下げて水を高松側に流し込もうとした。工事は難行し、四一〇mのうち、九一mを残すところで開城となった。工事奉行は間にあわなかった責を負って自刃したといわれている。里人はこれを哀れみ塚をたてて供養した。

蛙ヶ鼻に今日現存する堤防遺跡の一部

岡山県指定史蹟　備中高松水攻長野川堰止並に水路遺蹟

宗治の自刃により、和議が成立し高松城は開城となった。時に天正一〇年六月五日のできごとである（一説には六月七日開城の説もある）。秀吉、蛙ヶ鼻附近の堤防を切り、追撃に備えて引返し、六月三日、光秀の軍を山崎で敗り信長の弔合戦に勝利し、天下掌握の緒を開いた。時に秀吉四六歳であった。

高松城懐古　　大原桂南

殺身救衆又誰儔
城郭如今址尚留
追憶當年弔雄魄
翠松独有護林邱

城郭跡入口の傍らに立つ碑文の詩が何時までも印象的であった。

（参考文献）


『高松城の水攻』　高田馬治編
『高松城水攻年表』　高松城址保興会